

の古枝に咲けると、古歌に亦詠じ、或山民は、弓などにも作るなり、宮城野産も同種なり、其幹頗る高く、花は稍小さく、幹の本ハ疎なれば、モトアラの小萩とも云ふとぞ、今世上にて宮城野萩と呼ぶハ、紫色、薄紫、又紫白、交り等共に眺めよく、枝も長く垂れ、窈窕として亦愛すべき者多し、花戸にては、就中その紫艶最良なるを撰て、眞の宮城野種なり、杯と云、曬し賣るもの也、其枝細くして糸の如くなるを、亂れ萩と呼ぶ、

〔剪花翁傳前編四花〕萩 糸はぎ、花赤色、形小く、枝垂る也、白はぎあり、宮城野、花の色赤し、形ち少し、矢筈、又めどはぎともいひ、又雀はぎともいふ、色白し、高さ四尺許にも及ぶ、開花八月上旬也、方地土撰ばず、肥大便寒中に入べし、移分株冬より春彼岸迄よし、升水は灰汁にて煮るべし、又上酢にて煮れば愈よし、又方本口を沸湯に扨入、此湯さむれば沸湯と仕替扨入、如是三、三度も沸湯に替て後冷水にとくと漬よく水上たる時用ふべし、又方薄き筵を覆ひ、此上より沸湯を澆ぎかけ、玄ばらくして、冷水に漬おきて後扨べし、

〔玉勝間十三〕萩の大木の事

みちのくの宮城野わたりの萩は、高さ二丈あまりばかりなる多し、又同國の津輕の弘前の二里ばかりこなたに、大鰐といふところに、大日堂のある前なる林の中に、一木の、大木の、十餘丈ばかりの高さの、かこみ四圍ばかりなるあるを見れば、葉も花も全萩也、又さつまの國にも、萩の大なる木有といへりと、ある物にしるしたり、まことにや、

〔翁草三十九〕宮城野の萩は木萩にて、灌木のごとく、尋常の草萩とは異にして、弓などに作る樹也、また本あらこ萩といふは、梢に青き枝生出て、其枝に花咲ゆへ、本のあらはれざると云下略歟、宮城野の本あらこ萩露をもみ風を待ごと君をこそまで、

一山萩は北國の山中に有木也、花は白或は白紫咲分杯有、其大なる物は凡の柱に成べき程の木